

1/7 Sat.

第254回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No.254 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

1/8 Sun.

第254回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No.254 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Principal Guest Conductor
ピアノ
Piano
コンサートマスター
Concertmaster

チャイコフスキー
TCHAIKOVSKY

ラフマニノフ
RACHMANINOFF

[休憩]
[Intermission]

チャイコフスキー
TCHAIKOVSKY

山田和樹 (首席客演指揮者) -p.5
KAZUKI YAMADA

イーヴォ・ポゴレリッチ -p.6
IVO POGORELICH

小森谷巧
TAKUMI KOMORIYA

〈眠りの森の美女〉から“ワルツ” [約5分] -p.8
Waltz from “The Sleeping Beauty”

ピアノ協奏曲 第2番 ハ短調 作品18 [約33分] -p.9
Piano Concerto No. 2 in C minor, op. 18
I. Moderato
II. Adagio sostenuto
III. Allegro scherzando

マンフレッド交響曲 口短調 作品58
(スヴェトラノフ版) [約47分] -p.10
Manfred Symphony in B minor, op. 58 (Svetlanov version)
I. Lento lugubre
II. Vivace con spirito
III. Andante con moto
IV. Allegro con fuoco

※当初発表の曲目を一部変更しました。

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会
共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場

1/13 Fri.

第659回 名曲シリーズ
サントリーホール 19時開演
POPULAR SERIES No.659 / Suntory Hall 19:00

1/15 Sun.

第7回 川崎マチネーシリーズ
ミューザ川崎シンフォニーホール 14時開演
KAWASAKI MATINÉE SERIES No.7 / Muza Kawasaki Symphony Hall 14:00

指揮
Principal Guest Conductor
コンサートマスター
Concertmaster

黛 敏郎
MAYUZUMI

[休憩]
[Intermission]

マーラー
MAHLER

山田和樹 (首席客演指揮者) -p.5
KAZUKI YAMADA

林 悠介
YUSUKE HAYASHI

曼荼羅交響曲 [約22分] -p.11
Mandara Symphony

I. 金剛界曼荼羅: Tempo non équilibré
II. 胎藏界曼荼羅: Extrêmement lent

交響曲 第6番 イ短調 〈悲劇的〉 [約80分] -p.12
Symphony No. 6 in A minor “Tragische”
I. Allegro energico, ma non troppo
II. Scherzo
III. Andante moderato
IV. Finale

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：ミューザ川崎シンフォニーホール（川崎市文化財団グループ）（1/15）
※1/13の公演では、日本テレビ「読響プレミア」の収録が行われます。

1/19 Thu.

第624回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No.624 / Suntory Hall 19:00

指揮
Principal Guest Conductor
コンサートマスター
Concertmaster

矢代秋雄
YASHIRO

[休憩]
[Intermission]

R. シュトラウス
R. STRAUSS

山田和樹 (首席客演指揮者) -p.5
KAZUKI YAMADA

長原幸太
KOTA NAGAHARA

交響曲 [約37分] -p.14
Symphony
I. Prélude: Adagio - Moderato
II. Scherzo: Vivace
III. Lento
IV. Adagio - Allegro energico

アルプス交響曲 作品64 [約47分] -p.15
Eine Alpensinfonie, op. 64
夜 - 日の出 - 登り道 - 森への立ち入り - 小川に沿って歩く -
滝 - 幻影 - 花咲く牧場 - 山の牧場 - 林で道に迷う - 氷河 -
危険な瞬間 - 頂上にて - 幻 - 霧が立ちのぼる -
日はしだいにかげる - 哀歌 - 嵐の前の静けさ -
雷雨と嵐、下山 - 日没 - 終結 - 夜

指揮

山田和樹
(首席客演指揮者)

KAZUKI YAMADA, Principal Guest Conductor

日本のエース
“ヤマカズ”が挑む
超重量級プログラム



©読響

生命力あふれる音楽で、国際的に活躍する日本のエース山田和樹が、大作を並べた重量級の3プログラムを振る!

東京芸術大学指揮科で松尾葉子、小林研一郎に師事。2009年ブザンソン国際指揮者コンクール優勝を機に、ヨーロッパでのキャリアをスタートさせた。これまでにBBC響、パリ管、フィルハーモニア管、チェコ・フィル、サンクトペテルブルク・フィル、サンタ・チェチーリア管、ワシントン・ナショナル管、ドレスデン・フィルなどへ客演している。また、小澤征爾の代役として12年のサイトウ・キネン・フェスティバル松本でオネゲルの劇的オラトリオ〈火刑台上のジャンヌ・ダルク〉を振り、17年には〈魔笛〉でベルリン・コーミッシェ・オーパーにデビュー以降、オペラでも活躍。モンペリエ音楽祭、マントン音楽祭など国際的な音楽祭にも招かれている。22年にはバーミンガム市響とBBCプロムスにデビューし話題を呼んだほか、モンテカルロ歌劇場でベルク〈ヴォツェック〉、ベルリオズ〈ファウストの劫罰〉を指揮し、成功に導いた。11月にはモナコ公国の文化功労勲章シュヴァリエを受章。

スイス・ロマンド管首席客演指揮者を経て、現在バーミンガム市響首席客演指揮者(23年4月から首席指揮者兼アーティスティックアドバイザーに就任予定)、モンテカルロ・フィル芸術監督兼音楽監督、東京混声合唱団音楽監督兼理事長、横浜シンフォニエッタの音楽監督。渡邊暁雄音楽基金音楽賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞、芸術選奨文部科学大臣新人賞など受賞多数。これまでにCDも多数リリースしており、20年10月には読響との『マラー：巨人』が発売された。

1/7
土曜マチネー

1/8
日曜マチネー

1/13
名曲

1/15
川崎マチネー

1/19
定期

Mastino

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：アフラック生命保険株式会社

1/7
土曜マチネー

1/8
日曜マチネー

Artist



©Andrej Grlic

ピアノ

イーヴォ・ポゴレリッチ

IVO POGORELICH, Piano

奇抜な解釈と演奏スタイルで超人的なスケールの音楽を生み出し、世界を震撼させる鬼才。読響とは2016年、20年に共演して絶賛され、今回3度目の登場となる。1958年旧ユーゴスラヴィアのベオグラード生まれ。12歳で単身モスクワへ渡り、モスクワ音楽院で学ぶ。80年ショパン国際コンクールに出場し、個性的な演奏で議論を巻き起こした。本選に進めなかったことに抗議してアルゲリッチが審査員を辞任するなど一大スキャンダルとなり、世界的に注目を浴びた。81年にニューヨークのカーネギーホールでデビューし、以降世界各地で公演を重ねている。ベルリン・フィル、ウィーン・フィル、ロンドン響、シカゴ響など一流楽団と共演。録音も数多い。最新盤は、「ショパン：ピアノ・ソナタ第3番、夜想曲&幻想曲」(Sony Classical)。現在はクロアチア国籍で旧ユーゴ内戦後の慈善事業にも力を入れている。

1/7

土曜マチネー

1/8

日曜マチネー

Program Notes

チャイコフスキー 〈眠りの森の美女〉から“ワルツ”

ピョートル・チャイコフスキー（1840～93）の三大バレエ音楽といえば、〈白鳥の湖〉〈眠りの森の美女〉〈くるみ割り人形〉。これら3作はそのままクラシック・バレエにおける三大バレエとして高い人気を誇っている。3作中、最初に書かれた〈白鳥の湖〉は、チャイコフスキーの生前に十分な成功を収められず、作曲者の死後の蘇演によりレパートリーとして広まったのに対し、〈眠りの森の美女〉は生前から高い人気を誇り、くりかえし上演されている。

作曲のきっかけは1888年5月、マリインスキー劇場よりシャルル・ペローの童話〈眠りの森の美女〉を題材としたバレエ音楽の作曲を依頼されたことによる。依頼主である劇場ディレクターのイワン・フセヴォロシスキーは「ルイ14世風のスタイルでの上演」と「リュリやバッハ、ラモー風の音楽」を求めた。同年夏に送られた台本にチャイコフスキーは創作意欲を大いに刺激され、委嘱を引き受ける。振付師マリウス・プティバと踊りの詳細や楽曲の性格、各曲の時間などを綿密に打ち合わせた後に作曲が進められ、89年8月に楽曲が完成する。作曲中、チャイコフスキーはパトロンであったメック夫人への手紙に、バレエの筋書きがとても詩的であり、感激しながら最高の音楽を書いていると綴っている。

90年の初演時の総稽古では、臨席した皇帝アレクサンドル3世に冷淡な感想を述べられ、チャイコフスキーは屈辱感に苛まれたという。初演の反応も冷やかだったか、回を重ねるにしたがって観客からの人気が高まり、翌年11月には作曲家臨席のもと、早くも50回目の上演が祝われることになった。

全曲中、とりわけ広く親しまれているのがこの第1幕のワルツ。旋回しながら高揚するような力強い序奏で開始される。管楽器の伴奏に乗って弦楽器がのびやかな旋律を奏で、流麗で幻想味豊かな楽想がくりひろげられる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1888～89年／初演：1890年1月15日、サンクトペテルブルク、マリインスキー劇場／演奏時間：約5分

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、コルネット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（グロッケンシュピール）、弦五部

ラフマニノフ

ピアノ協奏曲 第2番 八短調 作品18

セルгей・ラフマニノフ（1873～1943）はロシアで生まれ、後にアメリカに渡った作曲家、ピアニスト。ピアノ協奏曲第2番はラフマニノフの代表作であるばかりでなく、古今のピアノ協奏曲のなかでもっとも人気の高い作品のひとつとなっている。ラフマニノフ本人が卓越したピアニストだったこともあり、全編にわたって独奏ピアノが華麗な技巧を披露する。甘美で叙情的な旋律に富み、フランク・シナトラの〈I Think Of You〉をはじめポピュラー音楽でのカバーも多く、フィギュアスケートや、TVアニメ「FAIRY TAIL」などBGMでの活用例も目立つ。

作曲は1900年から01年にかけて、27歳でこの作品に取り組んだラフマニノフだが、この曲の誕生以前に深刻な創作活動の危機を迎えていた。1897年、満を持して発表した交響曲第1番の初演が大失敗に終わり、手厳しい酷評が浴びせられた。ラフマニノフは挫折から立ち直れないまま、以後約3年間にわたりほとんど作品を発表できなくなってしまう。しかし、音楽に造詣の深い精神科医ニコライ・ダーリによる催眠療法をきっかけに自信と創作意欲を回復し、ピアノ協奏曲第2番の作曲に挑む。1901年、自身の独奏による初演は大成功を収め、作曲家ラフマニノフの名は一躍世に知られることになった。作品は恩人であるダーリに献呈されている。

第1楽章 モデラート 冒頭の厳粛な序奏は故郷のロシア正教の鐘を模している。哀愁を帯びた楽想がくりだされ、雄大なロマンティシズムにあふれる。

第2楽章 アダージョ・ソステヌート 瞑想にふけるかのようなピアノ独奏と、管弦楽の柔和な響きが、豊かな陰影を描き出す。

第3楽章 アレグロ・スケルツァンド 舞曲風の活発な主題で開始される。華やかな独奏と力強い管弦楽が一体となって、輝かしい頂点へと突き進む。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1900～01年／初演：1901年10月27日（露暦）、モスクワ／演奏時間：約33分

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル）、弦五部、独奏ピアノ

1/7

土曜マチネー

1/8

日曜マチネー

Program Notes

チャイコフスキー

マンフレッド交響曲 口短調 作品58 (スヴェトラノフ版)

題材となった〈マンフレッド〉は18世紀イギリスのロマン派詩人バイロンによる劇詩。孤独な放浪者マンフレッドは哲学や科学などあらゆる叡智^{えいち}を身につけた一種の超人だが、恋人であるアスターティを死に至らしめたことを忘れられず苦悩する。呪文で精霊や魔女を召喚するも、過去の忘却も死も叶わない。邪神の館でアスターティの亡霊に会って、ようやく地上の苦しみが終わると告げられる。

〈マンフレッド〉による標題交響曲を着想したのは、ロシア五人組の中心的人物バラキレフだった。バラキレフは自ら作曲せず、この題材をまず標題交響曲の先駆者ベルリオーズに提案するが、高齢もあって辞退される。バラキレフは続いてチャイコフスキーに作曲を勧めた。一度は拒んだチャイコフスキーだが、やがて熱意をもって作曲に取り組み、長大な交響曲を完成させた。

なお、今回使用されるスヴェトラノフ版では、第4楽章の中盤で大幅なカットが施され、さらに終結部では第1楽章の終結部が再現される。

第1楽章 レント・ルグープレ 冒頭でバス・クラリネットとファゴットにより沈鬱^{ちんうつ}なマンフレッドの主題が奏でられる。アルプス山中をさまようマンフレッドの懊悩^{おうのう}が表現される。後半で弦楽器がアスターティとの甘美な思い出を呼び起こすが、我に返るかのように悲劇的なムードで楽章を閉じる。

第2楽章 ヴィヴァーチェ・コン・スピリト 虹の下でアルプスの精霊がマンフレッドの前に現れる。スケルツォ風。中間部ではアスターティの姿が甦^{よみがえ}る。

第3楽章 アンダンテ・コン・モート 素朴で安らいだ山上の暮らしを描く。

第4楽章 アレグロ・コン・フォーコ 禍々^{まがまが}しい邪神の館の饗宴^{きょうえん}。マンフレッドはアスターティの霊に直面する。通常の版ではマンフレッドが静かに現世に別れを告げるが、本版では荒々しく曲を閉じることになる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1885年／初演：1886年3月23日、モスクワ／演奏時間：約47分

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット3、ホルン4、トランペット2、ホルネット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル、タンブリン、シンバル、サスペンデッド・シンバル、大太鼓、銅鑼、鐘）、ハープ2、弦五部

黛 敏郎

曼荼羅交響曲

ベートーヴェンから浪花節まで、というキャッチコピーで、あらゆる音楽をお茶の間に紹介したテレビ番組「題名のない音楽会」の企画構成をはじめ、様々に活躍した黛^{まゆみとしろう}敏郎(1929～97)。その創作はクラシック音楽だけでなく、ジャズ、民族音楽、古典邦楽、電子音楽など多彩な音楽を取り込んで展開され、国際的な評価を得た。

代表作は、寺院の鐘の響きを音響解析して、男声合唱と3群のオーケストラによる空間配置で鳴らした〈涅槃交響曲〉(58年)とされる。古びた鐘の一突きに心を奪われ、新しい響きを求める姿勢に引導を渡されたことがきっかけとなり、単なる音響の新しさだけでない、音響を生み出すに至った伝統や精神的な動機を基にした創作にシフトしていった。

〈曼荼羅交響曲〉は、仏教思想をヴィジュアル化した曼荼羅にならって、仏教思想を音響の集合体として定着しようと試みたものである。

曼荼羅のヴィジュアルイメージを、いかに音響と、その時間、空間的な変容で表現するかを意図して、ピアノ、ハープ、チェレスタを中央に、弦楽を左右に分割配置するなどの工夫がある。また、曼荼羅の音構築に使われたのは「古今東西の名鐘に共通する音成分」であり、長い時間によって選別された名鐘の音を分析して得られた2組の陽旋法が基本になっている。

本作で使われた金剛界と胎蔵界の曼荼羅は、密教の寺院では本尊を中心にして右に胎蔵界、左に金剛界の曼荼羅が配置される。金剛界の金剛はダイヤモンドのことで、悟りの智慧が何にも揺るがない堅固な完璧さを持っていることを、胎蔵界の胎蔵は、子供が母の胎内にいるように大日如来の慈悲で悟りが育まれることをあらわす。

初演以後は、NHK交響楽団の世界一周公演で、インド、スイス、ポーランド、ドイツ、イタリア、フランス等で上演され、好評を得た。ルツェルン音楽祭の公演では、指揮者のオットー・クレンペラーが、この曲を聴いて、驚き、称賛した。〈西 耕一 音楽評論家〉

作曲：1960年／初演：1960年3月26日 東京／演奏時間：約22分

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2（エスクラリネット持替）、バスクラリネット、ファゴット、コントラファゴット、ホルン2、トランペット2、トロンボーン2、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シロフォン、グロッケンシュピール、ヴィブラフォン、チャイニーズ・シンバル、サスペンデッド・シンバル、銅鑼、鐘、鈴、キン）、ハープ、ピアノ、チェレスタ、弦五部

マーラー

交響曲 第6番 イ短調〈悲劇的〉

19世紀にすでに頂点をみた「交響曲」を、20世紀になってもなお書き継ごうとしたグスタフ・マーラー（1860～1911）。彼は、古典派のハイドンが打ち立てた交響曲の約束事を、さらにはベートーヴェンが九つの交響曲で越えてみせた一線をも、大きく踏み越えた。楽章を六つも並べたり、独唱者を途中で挟んだり……。だがそれは、伝統の無視、ということではない。伝統とあえて戯れてみせ新時代を刻印した、という面もあるのだ。

交響曲第6番はその最たるケース。4楽章構成で、声楽をいっさい含まず、両端楽章が速く、その間に舞曲系の楽章と遅い楽章がある（本作の場合、これら中間楽章を逆に置くケースもあるが、今回は指揮者の判断でこちらをとる）。これは、いかにも伝統寄りだ。しかし、にもかかわらず伝統からのさまざまな「ずれ」が潜んでいるのに気をつけたい。本作においてずらされる最大にして肝要な伝統は、ずばり、「短調から長調へというドラマツルギー」である。

思えば交響曲のドラマツルギーにおいては、「短調で始めたら長調で締める」というのが定石であった。なんといっても、八短調で始まり八長調で終わる有名なベートーヴェンの第5交響曲の存在が大きい。あの「苦悩から歓喜へ」という構成が、以後、交響曲のモデルとなったのである。対してマーラーの本作は、イ短調に始まり、イ短調に終わる。それだけではない。「長調になろうとしてもなれない」という「もがき」をも、この曲で大々的にデモンストレートしてみせたのである。

この交響曲は、開口一番、闘争的なマーチのリズムでイ短調の音楽（第1主題）を進めてゆく。それを2台のティンパニが軍楽リズムで締めくくろうとすると、トランペットにパッと長調の響き（ラ・ド#・ミ）がとまる。ところが、これがさっと短調の響き（ラ・ド・ミ）に戻ってしまうのだ。真ん中の「ド#」が半音下がって「ド」になるだけなのだが、まるで「苦悩から歓喜へ」という物語は最初から挫折することが運命づけられている、と言わんばかりである。もちろん、1時間以上に及ぶこの交響曲には、そこかしこに長調になる場面が置かれている。ポイントは、そんな長い時間経過において、「真ん中だけ半音下がる」事件が、何度も何度も襲ってくる点にある。

第6交響曲における伝統との違いは他にも見られるが、いま一つ、楽器編成を

挙げておこう。なんといっても打楽器である。その種類の多さが尋常ではない。そこには「楽器」とは呼べぬカウベル（放牧の牛の首につける大きな鈴状のベル）や、ハンマー（木槌）も見える。ハイドンから、ずいぶん遠くに来たものだ。

本作が書かれたのは1903年から翌年にかけて。マーラーがウィーン宮廷歌劇場の芸術監督として精力的に活動していた頃で、作曲家としての名声も高まり、妻アルマ・シントラーとも結ばれ、二人の子どもを授かるという、まさに幸福の絶頂に彼はいた。

第1楽章 行進曲風の第1主題はイ短調。古くから、悲しみや嘆きを表すとみなされている調である。讚美歌風のパッセージを経て現れる第2主題は、対して幸福感に満ちたヘ長調。ただし、そこにも行進曲が混入してくる。楽章なかほど、カウベルが遠くから聞こえてくるシーンは、マーラーによれば、高みを目指す「さすらい人」が抱く「地上の遥けさの感情、極限の孤独」を表現している。

第2楽章 スケルツォと称した諧謔的な3拍子の音楽。これもベートーヴェン以来の伝統だ。ゆるやかな、とぼけた感じのトリオ部が2種はさまる。「真ん中だけ半音下がる」の出現率が、終わりのほうで高まる。

第3楽章 「真ん中だけ半音下がる」が出てこない唯一の楽章。子守歌と夜想曲があわく混じり合ったような、穏やかな、しかしいびつな美をも含んだ音楽。転調がもたらす、寄せては返す感情の波がすごい。

第4楽章 阿鼻叫喚というにふさわしい破滅的な音楽である。「真ん中だけ半音下がる」は楽章中再三現れるが、衝撃的なのは、なんといっても幕切れ。ティンパニの軍楽リズムとともに突発的に鳴るその和音には、第1楽章にはあった、あのパッとともる長調の響きがない。最初から短調なのだ。歓喜の可能性はついに根絶された、というわけである。多難な20世紀の行く末を予言？ 本作が〈悲劇的〉と呼ばれるのも、むべなるかな。

〈船木篤也 音楽評論〉

作曲：1903～04年／初演：1906年5月27日、エッセン／演奏時間：約80分

楽器編成／フルート4（ピッコロ持替）、ピッコロ、オーボエ4（イングリッシュ・ホルン持替）、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3、エスクラリネット、バスクラリネット、ファゴット4、コントラファゴット、ホルン8、トランペット6、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ2、打楽器（グロッケンシュピール、シロフォン、小太鼓、銅鑼、大太鼓、カウベル、ハンマー、トライアングル、シンバル、ルーテ、鐘）、ハープ2、チェレスタ、弦五部

矢代秋雄
交響曲

矢代秋雄^{やしろあきお} (1929～76) は、西洋美術史家の矢代幸雄の長男として東京で生まれ、芸術的な環境に恵まれて育った。5歳からピアノを学び出すと同時に作曲を始め、10歳から諸井三郎に作曲を、東京音楽学校では池内友次郎^{いふくべあきら}、伊福部昭に師事して、日本で最高の音楽教育を受けたアカデミズムの申し子であった。

パリ音楽院における4年間では、徹底的にフランスの書法を学び、メシアンのクラスも聴講した。その成果は1956年の〈弦楽四重奏曲〉にまとめられた。本日演奏される〈交響曲〉は、46歳で早逝した矢代にとって最初で最後の交響曲となった。「作曲とは、鯛の目の下の肉でカマボコを作るようなもの」という矢代の口癖にあるように、それまでに培ってきた多彩な音楽を厳選して、自己の独自の発言として統合した作品である。

曲は4つの楽章からなる。**第1楽章**は、パリで書きかけた交響曲の断片を使っている。オスカー・ワイルドの〈サロメ〉への前奏曲のつもりだったとされるが、弦楽による神秘的な、ややストラヴィンスキー的な風合いを持つ導入は、交響曲全体にフランクの循環主題的にあらわれ、メシアン^{メシアン}の不可逆リズムなども聞き取れる。**第2楽章**は諸井三郎由来の諸諷^{かいぎやく}的なスケルツォにさらなる発展を加えた、矢代独自の世界である。作曲の8年ほど前に読んだ小説から触発された「テンヤ、テンヤ、テンテンヤ、テンヤ」（八分の六拍子、八分の二拍子、八分の六拍子）という神楽^{かぐら}囃子リズムが、色彩伽藍^{がらん}の如き絶妙な管弦楽を伴って反復されるが、ティンパニパートへのこだわりは学生オーケストラで同楽器を担当した矢代ならではの。**第3楽章**は2つの主題があらわれるレント。ヴィブラフォンやチェレスタ、ハーブ、弦楽による美しい変奏が聴ける。**第4楽章**は序奏付きのソナタ形式であり、エネルギーを堆積させるアダージョと、各楽章で変容、循環された主題が組み合わされ、圧倒的な盛り上がりと急速な疾走は、突如断ち切られ終わる。〈西 耕一 音楽評論家〉

作曲：1958年／初演：1958年6月9日 東京／演奏時間：約37分

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替、アルトフルート持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3（バスクラリネット持替）、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、トムトム、タンブリン、ウッドブロック、シンバル、サスペンデッド・シンバル、銅鑼、グロッケンシュピール、シロフォン、ヴィブラフォン、鐘）、ハープ2、ピアノ、チェレスタ、弦五部

R. シュトラウス
アルプス交響曲 作品64

リヒャルト・シュトラウス (1864～1949) は、リストやワーグナーを継承して発展させた交響詩やオペラに数々の傑作を残した。まずは、交響詩に集中的に取り組み、大編成のオーケストラを駆使して作曲家としての手腕を最大限に発揮する。そして、交響詩〈英雄の生涯〉(1898) を最後にオペラへと移ってしまい、その後シュトラウスが書いた大規模な管弦楽曲は、〈家庭交響曲〉(1904) とこの〈アルプス交響曲〉を数えるだけとなった。

シュトラウスは、1908年にドイツ・アルプスの最高峰ツークシュピッツェを見上げるガルミッシュ・パルテンキルヒェンに山荘を構えた。〈アルプス交響曲〉は、まさに目の前に広がる光景を音楽にしたもので、雄大な自然の移り変わりや登山者がアルプスの山を登り、頂上をきわめ、下山する様子を、多種多様な打楽器を含み、舞台裏の多数の金管楽器が加わる巨大編成の管弦楽で鮮やかに描いた。

「私の〈アルプス交響曲〉を反キリスト者（アンチ・クリスト）と呼ぶことにしよう。なぜなら、自己の力による道徳的な浄化、束縛からの解放のために、永遠で崇高な自然への崇拝があるからだ」。シュトラウスが語る「反キリスト者」という表現は、フリードリヒ・ニーチェ (1844～1900) の著作からきている。『反キリスト者—キリスト教に対する呪詛^{じゅそ}』(95年出版) は、ニーチェの事実上最後の著作である。シュトラウスとニーチェを結びつける創作といえば、ニーチェの著書〈ツァラトゥストラはかく語りき〉(92年出版) と同名のタイトルで、作曲家が「ニーチェの天才を讃えるもの」として書いた交響詩がすぐに思い浮かぶ。〈ツァラ〜〉ではニーチェの思想を描き出したが、〈アルプス交響曲〉とニーチェの関係は、〈ツァラ〜〉のようにわかりやすくはない。

創作過程をたどると、〈アルプス交響曲〉は、最初の構想段階では「芸術家の悲劇（日の出）」というニーチェ風のタイトルが付されていた。1902年頃のスケッチでは4楽章構成とし、第1楽章が「夜明けと日の出／登山：森（狩り）」等々の記述もみられる。しかし、その後、構想を練り直し、11年からは自然礼賛へと内容を変更した。その結果、音の大伽藍^{だいがらん}といった様相のこの交響曲から表面上、哲学的な思索を感じさせるものはない。とはいえそこには、自然の力を前にして己の無力を悟

るというニーチェに端を発するモティーフが隠されているのである。

単一楽章の長大な交響曲には、各場面を示すタイトルが付いている。夜：弦楽器とファゴットの下行音型で夜の情景が暗示され、金管による荘厳な山の動機が続く。日の出：大管弦楽で強烈な輝きを放つ太陽の動機が現れる。登り道：登山の開始。低弦とハーブによる登山の動機が現れ、岩壁の動機は金管で奏される。舞台裏からは狩りのホルンが響く。森への立ち入り：弦楽器で森のざわめきが暗示され、森の旋律が金管で重々しく響き、登山の動機も絡む。小川に沿って歩く：川の流れが描写される。滝：岩壁から落下する水の様子が描かれ、登山の動機も現れる。幻影：登山者は滝にみとれる。ハーブのグリッサンドが美しい。花咲く牧場：甘美な旋律が静かに広がり、気持ちも浮き立つ。山の牧場：のどかな情景。遠くから放牧のカウベルが響く。林で道に迷う：迷路の動機に登山の動機と岩壁の動機が絡む。氷河：トランペットが高らかに響き、登山の動機が現れる。危険な瞬間：登山者は滑り落ちそうになる。頂上にて：トロンボーンに導かれ、オーボエが美しい旋律を奏する。幻：これまでの動機が次々と現れる。霧が立ちのぼる：音楽は静まり、霧が空を流れる。日はしだいにかげる：太陽の動機が弱々しく現れる。哀歌：太陽は隠れ、木管が寂しげな旋律を歌う。嵐の前の静けさ：ティンパニのトレモロが遠雷を暗示する。鳥たちは不安そうに囀る。雷雨と嵐、下山：登山者は慌てて下山する。登山の動機は上下が逆の反行形となり、各動機は登山とは逆の順番で再現される。日没：太陽の動機が大きく引きのぼされ、雄大な景色が描写される。終結：これまでの各動機が現れ、登山者は一日を振り返る。夜：冒頭と同じ夜の様子。山の動機や登山の動機が静かに回想される。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1911～1915年／初演：1915年10月28日、ベルリン／演奏時間：約47分
楽器編成／フルート4（ピッコロ持替）、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン持替）、ヘッケルフォン、クラリネット3（バスクラリネット持替）、エスクラリネット、ファゴット4（コントラファゴット持替）、ホルン8（ワグナーチューバ持替）、トランペット4、トロンボーン4、チューバ2、ティンパニ2、打楽器（大太鼓、シンバル、トライアングル、小太鼓、銅鑼、カウベル、ウィンドマシーン、サンダーシート、グロッケンシュピール）、ハープ2、チェレスタ、オルガン、バンダ（ホルン9、トランペット2、トロンボーン2）、弦五部